

「MMT」という言葉に対し国民の中で不信感を募らせている人も少なくないのでは？」

令和元年 7 月 31 日

●よっぴさんからの質問

今回の質問ですが、「MMT」という言葉に対し国民の中で、またなにか新しくて難しそうな言葉で私たちに不利な経済政策、既得権益者が儲かるシステムを押し通そうとしているのではないか？と思っている方が多いのではないか？という疑問です。私は MMT とは現代における諸国家において貨幣がどのようにして生まれるか、ということをつまびらかに根本説明をしている事実にはすぎないと理解しています。それに基づき国民のために国家、政府、果ては内閣、各省庁がどのようなことができるのだろうか？というところに本質があると思います。「MMT」という覚えやすい略語はいいのですが、過去の日本において聞こえのいい「略語」によって結局失望を強いられたことが多かったような気がしますので、個人的な疑問ですが西田先生のご意見をおうかがいしたいです。

●西田昌司の答え

「Modern Monetary Theory」をそのまま訳すと「現代貨幣理論」となりますが、あまりぴんと来ませんし、頭文字をとって「MMT」と略すと何だか怪しげな感じがします。もっとわかりやすい良い名前はないものか、と私も思います。

どうやって貨幣が生まれるかについての理解が MMT の骨子です。多くの方が、銀行は人々から集めた預金を元手として貸出しを行っている、と思っていますが、実際はそうではありません。貸出しによって（銀行預金という名の）貨幣が創造されるのですし、元手は不要なのです。銀行は、（借

り手側に返済能力がある限りにおいて) いくらでも貸出しを行うことができますが、これが、MMT が主張する「信用貨幣論」です。銀行は、我々だけでなく政府にも（新規発行国債の購入によって）貸出しを行います。政府への貸出しも元手は不要です。

政府は、国債発行によって得た資金によって公共事業等の支出をしますが、すると支出した分だけ誰かの所得が増えます。これは考えてみれば当たり前の話ですし、貨幣は使っても消えないのですが、このことを理解していない国民や政治家が非常に多いのです。以下のことを皆がしっかりと身に付けなければなりません。

- 誰かの所得は、誰かの支出
- 誰かの資産は、誰かの負債
- 誰かの黒字は、誰かの赤字
- 誰かの債権は、誰かの債務

政府が国債を発行して 1 兆円の負債を抱えると、誰かの資産が 1 兆円増えるのです。「国の借金（正しくは、政府の負債）が 1000 兆円を超えた」と聞くと、多くの国民は「今にも日本は破綻する」と恐怖に駆られますが、これは別の見方をすると「誰かの資産が 1000 兆円を超えた」わけでありまして、政府の負債のお陰で国民は豊かになっているのです。

そもそも、誰かが借金を増やさなければ経済は成長しませんし、借金を増やすことと経済成長することは同義なのです。また、経済が成長しているということはインフレ状態ということですし、需要が供給を上回ることで物価が上がって金利も上がります。

今の日本はデフレ状態ですから、誰かが借金を増やさなければデフレから脱却できないのですが、デフレ下では企業も内部留保を貯め込むばかりですので、最後は政府が借金を増やすしか手がありません。政府には通貨発行権がありますので財政破綻の心配など全くありませんし、（過度のインフレにならない範囲内で）いくらでも借金を増やすことができるのです。

MMT を「金融陰陽論」とでも呼べば少しはわかりやすくなるでしょうか。何か良い名前があれば是非とも私に教えてください。

反訳：ウッキーさん

Copyright：週刊西田 <http://www.shukannishida.jp>